「森銑三刈谷の会」だより 56(2026/10/17)

発行　2026/10/17（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

56:2026/9/19(土) 三ツ松悟「小学唱歌を愛した森銑三」(参加13人)

「小学唱歌を愛した森銑三」を顧みて

三ツ松　悟

この度図らずも知見豊富な「森銑三刈谷の会」で課題提供と進行役を勤めさせていただいた。

森銑三の膨大な著作や人物像や対人関係の知識に極めて乏しい私が取り組めるジャンルは限定されていた。思案の末に選ばせていただいたテーマ「小学唱歌を愛した森銑三」が妥当であるかどうか自信がなく最後まで不安であったが、資料を提供して下さった神谷磨利子さんはじめ会員の皆様のご理解で無事終了し、責任を果たせたことに安堵の気持ちで一杯である。

当初思い描いた森銑三とクラシック音楽界との接点を模索する中で、偶々目についたのが銑三少年と小学唱歌との出会いと思い出を綴った記述であった。

時は明治の中頃で欧米の芸術文化導入に邁進していた日本は音楽の分野でも外国人音楽家を招聘し洋楽の基礎を固める中で小学唱歌の普及に着目し、日本人による日本人にあったメロデイやリズムの唱歌が多く生み出された。

森銑三も小学校1年生になった時から次々に出現する小学唱歌に魅せられ、子供には難しい歌詞を覚え歌い楽しみながら成長した。

その思い出を70年経過した昭和44年(1969)頃から纏め出し、雑誌『ももんが』(1973年2月号）に「唱歌の思い出」と題して掲載している。

〝私の唱歌の思い出は鉄道唱歌から始まる〟という書き出しで始まる中で、小学Ⅰ年生になってオルガンに接した時の興奮と〝桃太郎〟や〝金太郎〟の歌を教わりながら上級生の歌う軍歌の中から時代を察する感受性の芽生えも窺わせている。日露戦争に突入した2年生の頃は小学唱歌も軍歌が中心になっていたようで〝広瀬中佐〟の歌をはじめとした勇ましい歌を多く教えられた思い出が記されている。

高等小学校の4年間は世の中も平穏無事で小学唱歌も様変わりし〝鏡なす〟とか〝思出づれば〟など難解な歌を習わされて苦しみながらも歌詞に愛着を持ち、覚えきっているところなどは流石で、銑三少年の面目躍如である。

〈歌は世につれ世は歌につれ〉の譬えの中で西洋音楽を基調とした小学唱歌が定着し、銑三少年もすっかり唱歌の虜になっていた高等3年の思い出は出色である。高等2年の女子生徒たちが学芸会に歌う曲を教室の窓越しに聴いてうっとりと聴き惚れた。

〝何とも云われぬ快さで今でもその時の気持ちが忘れられぬ〟と述懐している。歌の名前は〝露の玉〟で、これは後になって知ったそうであるが、聴いただけでは物足りず家に出入りのお針子さんの唱歌帳を借り受け曲符と歌詞を写し取り、趣味の銀笛で吹いてみて歌も物にしたと書いている。因みに歌詞は格調高い美文であるが、一番も二番も今でも記憶しており、この曲が一生を通じて大好きな歌であると記述しているから、森銑三の並外れた記憶力は少年時代に既に培われていたと感無量である。このくだりを読んで私も感銘し明治唱歌の〝露の玉〟を聴いてみたくなりネットで探し当てた。1分10秒の短い曲であるが作詞は大和田建樹、作曲ウェブスターで原曲は讃美歌である。

簡素であるが清らかで気品あふれた曲調であった。

パソコンにダウンロードして例会時に持ち込み、皆さんにも聴いて貰いながら一緒に森銑三の少年時代を偲ぶことが出来た。同時に森銑三に対するこれまでの畏敬に加えて親しみと暖かみを感じることが出来たのは大きな収穫であった。

余談になるが例会後の夜、私はなかなか寝付かれなかった。〝露の玉〟のメロデイとともに私の脳裏を占めたのは、わが身の少年時代の世情と私情はどんなものであったろうかという回想で眼が冴えた。

行き詰まった軍国主義が崩壊し民主主義が登場した激変の時代に少年時代を過ごす中で〝リンゴの唄〟が世の中を明るくしてくれたが、中学校に通い出す頃に関心を持ったのは歌ではなく映像文化への憧れであった。戦時中に弁士の喋る活動写真を見た覚えもあり、1936年開催のベルリン・オリンピックを宣伝した〝民族の祭典〟や〝美の祭典〟を見て映画のすばらしさに感動したが、終戦後に入って来たアメリカ映画には子供ながらに心がときめいた。

その頃大黒座で上映された映画の中で良く覚えている

のは〝心の旅路〟と〝聖(セント)メリーの鐘〟の二本であり、主演女優のジュリア・ガースンやイングリッド・バーグマンの美しい姿態や演技に魅せられた。

極め付きは高校2年生になった頃に見たアメリカ映画〝哀愁〟であった。この映画は日本国中の映画ファンを魅惑の渦に巻き込んだが、思春期を迎えていた私には特に強烈で衝撃が心の奥深くに染込んだ。

物語の進行も然ることながら、主演女優のヴィヴィアン・リーの美しさと主演男優ロバート・テイラーのカッコ良さとロケーションのすばらしさに感動した。

後日談になるが20年後の昭和45年(1970)にヨーロッパ旅行の機会を得てロンドンに赴いた。

テムズ河右岸に位置するロイヤル・フェスティバルホールでの会議終了後に同行者と一緒に電車で渡った鉄橋が〝哀愁〟の冒頭舞台であるウォータールー・ブリッジと並行していた。すぐ目の前に〝哀愁〟の舞台があり、テムズ河の流れがさざ波を立てていた。

憧れの橋を眺めたがそれだけでは気持ちが収まらず、ガス灯けむる夜のウォータールー・ブリッジを歩いて渡りたくなり、ホテルに帰着後1人で外出し1時間かけて目的地に到着し〝哀愁〟の冒頭シーンに思いを馳せたのが懐かしい。

他にも〝駅馬車〟や〝黄色いリボン〟のジョン・ウエインやターザン映画など戦後にどっと押し寄せた欧米文化への傾注が当時の少年たちの憧れであった。

翻って21世紀、現代の少年たちを熱中させるものは何であろうかと考えた。テレビ全盛の時代は過ぎ去っている。AIが世界を席巻する時代の子供たちの夢と憧れは歌でもなく映画でもなくドラマでもなく、もっとデジタルな空間文化ではなかろうかと森銑三の「唱歌の思い出」を頭に浮かべながら眠りに就いた。

「旅順陥落祝捷歌」(1905)と「広瀬中佐」(1905)

鈴木　哲

森(1973/2)「唱歌の思い出」『ももんが』の「日露戦争[1904/2-05/9]が、[刈谷尋常小学校]二年生の終わりに近い頃から始まつて」から森入学は1902/4、「(広瀬中佐の)歌を私等は、尋常三年生になつて間もなく教はつて」から作詞はc.1905/4と分かる(広瀬武夫生没1868/7-1905/3)。広瀬戦死は「三十八年[1905]の元旦」「旅順の陥落」の3か月後である。旅順陥落祝捷歌(1905)は開成館音楽課編で、歌詞「一月一日」は「いちがついちじつ」と詠う(開成館音楽課,1905)。「いちがついちじつ」は千家尊福(せんげたかとみ)作詞・上真行(うえさねみち)作曲『一月一日』(1893)も同様である。同歌の歌い出しは「年のはじめの例とて」で、フジテレビ「新春かくし芸大会」のテーマ曲として用いられた。

「小学唱歌を愛した森銑三」から感じたこと

David Dykes

三ツ松さんの発表「小学唱歌を愛した森銑三」は大いに参考になりました。

特に、世界の政治・経済・軍事的な状況が低下なるにつれて、歌い方が少しずつ静かになって心持ちが悲しくなる模様が浮きぼりになる気がします。或る意味ではそれは「慰め」とは言えますが、最初の狂いあげる「凱旋！凱旋！」の段階からそれが言えないことは、やはり悲しい。もちろん、どの国でも同じ事が言え、少しも区別を立てるつもりはありません。

森銑三の歌っていた唱歌と軍歌

城内　志津

唱歌はとても大好きで、学生時代学んでいたことなので、懐かしく感じながら、とても有意義な時間となりました。ただ軍歌については、子どもを戦争に駆り立てるプロパガンダを担っていたのですから、その歴史は興味深いところですが、心情的には怒りや恐怖感がどうしても沸々と湧いてしまいます。

三ツ松さんの話をお聞きして

河橋　育実

三ツ松さんに「小学唱歌を愛した森銑三」をテーマに教えていただきました。

弟の三郎さんも音楽好きだったので、やはり銑三さんの影響があったのでしょうか？

小さい頃の銑三さんが小学校に通う子ども等が歌う鉄道唱歌を覚えようとしたり、高等三年の頃に気になった歌を銑三さんのお母様のところにお針お稽古に来たお初さんから唱歌帳を借りて写したりされたそうです。銑三さんは好きな歌を覚えるための労力は惜しまない人だったのですね。

三ツ松さんの子どもの頃の思い出として、下校時に小学唱歌より軍歌を歌っていたと言われたのが印象に残りました。三ツ松さん　ありがとうございました。

時々口ずさむ唱歌

神谷　美恵子

時々口ずさむ唱歌の誕生にたくさんの人達の関わりと努力があった事が分かり、興味深かったです、銑三さんの子供時代の唱歌の思い出には良き時代のほのぼのとしたものを感じました、戦争と共に唱歌も変わっていき、時代に利用されていくのですね。新しい唱歌が生まれた時代に三郎さんが童話を書き、その後銑三さんが唱歌の思い出を書いている事も頷けました。

「まさかりかづいて金太郎」

神谷　磨利子

森銑三「唱歌の思い出」の中で思わず笑いそうになったのは、尋常小学校一年生の銑三たちが、受け持ちの先生の弾くヴァイオリンに合わせて、校庭の大きな椎の木の下で丸くなって昔話「金太郎」の遊戯をする場面である。背が高く背筋のピンとした 70 年後の銑三からは想像しがたいような姿である。私たちは今、「まさかりかついで金太郎」と歌うが、銑三は「まさかりかづいて金太郎」と記している。

森銑三の「びいどろ障子」(『森銑三著作集続編』第 12 巻) に「かつぐ」という項があり、「担ぐ」は本来カヅクで、「カツグ」と発音するのは関東の訛りであるという南方熊楠の言葉を紹介している(p.241)。子どもの頃の春の祭りのお囃の「十日戎」でも「笹をかづいて千鳥足」だつた」とも書いている。まさかりは「かづく」だという銑三らしいこだわりが現れていておもしろい。

新たな切り口の面白さ

神谷　明子

三ツ松さんの「小学唱歌を愛した森銑三」の会は面白かった。

テキストの中に慈鎮作の「春のやよいの曙に」があり、ちょっとびっくり。私が、初句会で、余興として、唄いながら、舞っている曲が出てきた。これを明治 14 年頃の子どもが歌っていたんだと思うと、雅ではあるが、静かな中で、静かな遊びをしていたのかな、時間がゆったり流れているんだと思いました。新たな切り口であり、 面白かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

〝歌は時代を映す鏡〟

飯田　芳子

「明治東京逸聞史」森鉄三は井沢修二が招聘した、 日本に西洋声楽を興す基礎を作ったホワイチング・ メーソン(米国)に触れて、伶人(雅楽)たちの素養が大きく貢献したことを語る。日本の近代音楽の曙である。

続いて「唱歌の思い出」を読んだ。銑三さんによる鉄道唱歌から始まる銑三さんの「露の玉」の思い出は、 美しいコーラスによって高等小学校 3 年の少年の心の高揚感を一入感じることができた。三ツ松さんの心憎い演出の賜物であった。銑三さんにとって青春の 一ページを共にした時間そのものだったように思える。思い出が唱歌、軍歌を問わずそのまま時を駆け抜けて繰り返される感覚を覚えるのは、定かではないが日露戦争から太平洋戦争へという歴史が物語る所以か。そして鈴木三重吉による児童文学運動は当時の作家、作曲家による今に生きる名詞、名曲を数多く残している。歌は時代を映す鏡なのであろう。唱歌、軍歌の歴史が物語る今回の講座は同時に私の中の歴史でもあった。

予定

57：2026/10/17(土)：2 階展示コーナー：村瀬典章さん解説「村上文庫展「刈谷藩校　文礼館」」

58：2026/11/21(土)：神谷磨利子「森銑三と妻文子～『ゆづり葉 森文子遺稿』(1940)を通して」

〈12 月休会〉

59：2027/1/16(土)： 神谷磨利子「森銑三と池上幸二郎」

60:2027/2/20(土)：〈図書館の読書講演会予定〉

61:2027/3/27(土)：募集中―お申し出ください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊